

五〇〇号

のあゆみ

『月刊みんぱく』は今号で通巻五〇〇号を迎えました。それを記念して本特集では、本誌五〇〇冊分の歴史を、一〇〇冊ずつ、五つの時代にわけて紹介したいと思います。

「ささやかなひとりの施設にも、しつていただきたいこと、みてもらいたいものがすくなくない。また、ときどきのニュースもある。この雑誌は、この博物館をひろく紹介するとともに、刻々のうごきの情報をみなさんにお届けするものである」。

これは、本誌創刊号に掲載された梅棹忠夫初代館長による「創刊のことは」のなかにある一文です。みんぱくの開館を一カ月後にひかえた一九七七年一月に、B5判、カラーの表紙に本文は黒と茶色の二色で印刷された二四ページの中綴じの小冊子として本誌は誕生しました。通巻五〇〇号を迎えた今日においても、その精神はまったく変わっていないといつてよいでしょう。しかし、この四〇年のあいだには、やはり紆余曲折があり、試行錯誤や製作体制の変化も経験しています。この機会に本誌の歴史を振り返ってみましょう。

一〇〇号（一九八六年一月号）まで フォーマット・編集体制の確立

創刊号の内容を見ると、先の「創刊のことは」に続き、梅棹館長がホストを務める「館長対談」が六ページにわたり掲載されています。第一回のゲストはSF作家の小松左京さんでした。そして、みんぱくの建物、館内の名所などを紹介し、進行中の展示作業をビビッドに伝えるページもあります。展示資料を紹介するコーナーでは「ベルシャのペン入れ」が取り上げられています。また、世界の博物館を紹介するページや、研究者がフィールドワークでの体験を綴ったエッセイのページ、読者の質問に答える「読者のページQ&A」。こうして見ると、その後、何年にもわたって踏襲される誌面構成がすでにできあがっていることがわかります。

さて、広報誌によって広くみんぱくが存在を知ってもらう。その目的を達成するため、大学や公共施設のほかに配布先として浮上したのがみんぱく友の会でした。友の会は開館に先立つ一九七七年五月に設立され、財団法人民族学振興会千里事務局（現・一般財団法人千里文化財団）によって運営されていました。本誌は友の会会員に毎月届けられることになり、また事務局により書店での販売ルートも確保されました。こうして、みんぱくの編集委員会が企画・編集し、民族学振興会千里事務局が製作と発行を担うという体制が整い、これは二〇〇四年のみんぱくの法人化まで継続されることになりました。

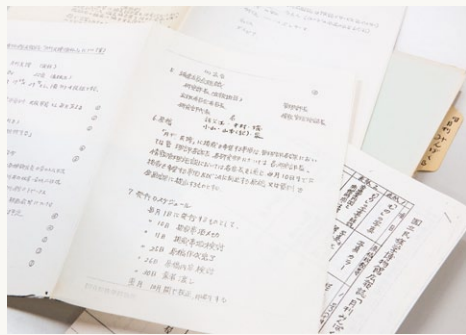
五二号（一九八二年一月号）から開始され、その後長期にわたる連載となったのが、「民話の世界」です。江口一久助教授（当時）が自ら採集したアフリカの民話を再話し、版画家の田主誠さんのシルクスクリーンによる版画が誌面を飾りました。その後、執筆者、地域を変えながら一四八回まで回を重ねる人気シリーズとなりました。

二〇〇号（一九九四年五月号）まで

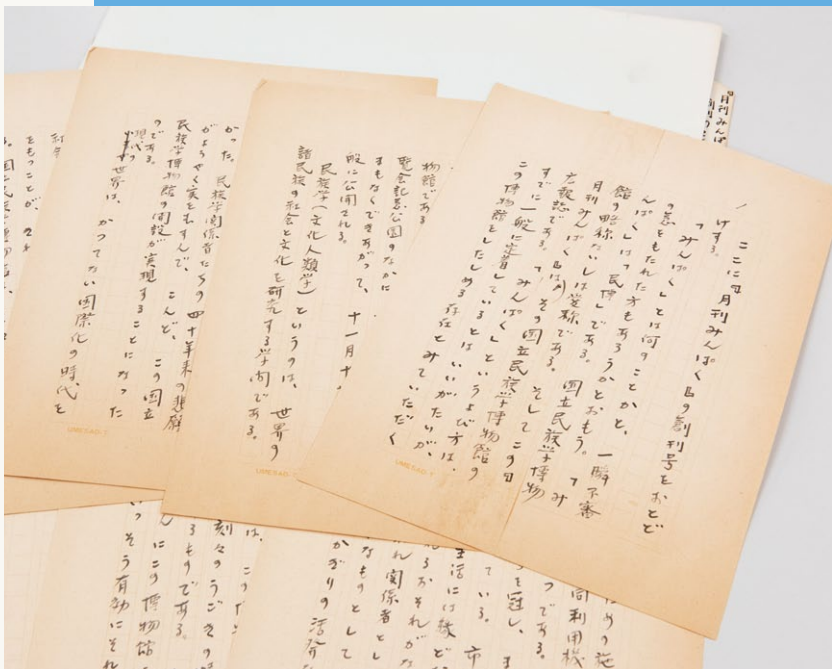
「館長対談」から「みんぱく・いたびゅう」へ

巻頭の名物企画として人気を博した「館長対談」はどのようにして生まれ

年	本誌のあゆみ	みんぱく・世界の動き
1987	・第5代編集長に中牧弘允が就任（1987年4月号〜1989年12月号）	・開館10周年
1986	・創刊100号記念表紙展を開催（1月〜2月） ・1月号で通巻100号を迎える。 記念座談会「市民のための学術ジャーナリズムをめざして」を掲載	・大阪で日本万国博覧会が開催される
1985	・第4代編集長に小川了が就任（1985年4月号〜1987年3月号）	・本館開設 ・6月 初代館長に梅棹忠夫が就任（1993年3月）
1982	・第3代編集長に杉田繁治が就任（1982年8月号〜1985年3月号）	・本館開館（11月）
1981	・第2代編集長に小山修三が就任（1981年4月号〜1982年7月号）	
1980	・ワールド・エッセイの記事を収録した『民族学の旅』が出版される	
1978	・本誌から生まれた書籍第1号、『館長対談』を収録した『民博誕生』が出版される	
1977	・本誌編集委員会が発足（4月） ・初代編集長に石毛直道が就任（1977年10月号〜1981年3月号） ・本誌創刊（10月）	
1974		
1970		



上：創刊前後の会議資料。梅棹初代館長自身がファイルを作り、まとめて保管したものである。1〜3号の誌面構成も検討されている（「梅棹忠夫アーカイブズ」より）
下：通巻2号の誌面とその指定紙。現在はパソコンで制作するが、2000年ごろまでは手作業も多かった



「創刊のことは」の手書き原稿（「梅棹忠夫アーカイブズ」より）

たのでしょうか。通巻一〇〇号を迎えた一九八六年一月号の歴代編集長の座談会で、初代編集長を務めた石毛直道助教(当時)がその経緯を語っています。「もし原稿をぜんぶ署名いりの手書きの原稿でうずめようとしたら、えらいことになる。ではどうしたらいいか。わりとうまく、書かずにページをうずめる方法は対談であろう。(笑)それで『館長対談』というのをかんがえた」のです。なんと、ページを手つ取り早く埋めるための苦肉の策だったのです。それが本誌を代表するコーナーになったのですから、おもしろいものです。

「館長対談」は当初はゲストに博物館関係者を迎えて、博物館の歴史や役割を縦横に語り合う内容でしたが、世界を舞台に活躍する研究者を迎えるシリーズへと変化し、最終的に対談集が一四冊も生み出されました。この間、一九八六年三月には梅棹館長が視力を失うという大きな危機もありましたが、梅棹館長が退任を迎えた一八六号(一九九三年三月号)まで継続されました。

編集委員会にとって、梅棹館長の退任後、「館長対談」の後の企画をどうするかが大きな悩みのタネでした。議論を重ねた結果、編集長が各界のかたがたに話を聞く「みんなく・いんたびゅう」に衣替えすることになりました。秋道智彌編集長を迎えた第一回のゲストは霊長類学者の河合雅雄さん、テーマは「ヒトの先祖は、なぜサルか」でした。「みんなく・いんたびゅう」の人選やテーマには歴代編集長の個性が色濃く反映され、読者にとってはそれが楽しみのひとつとなりました。

三〇〇号(二〇〇二年九月号)まで 社会との連携を深める

二〇〇年にわたり、大きなデザイン変更をせずに刊行されてきた本誌ですが、マンネリと言われる前に「うまくいつているうちに変えよう」という気運が生まれたのが一九九〇年代半ばの野村雅一編集長の時代です。通巻二〇〇号を迎えた一九九四年五月号に新企画「民族博物誌」が登場しました。生物多样性や地球環境問題に関心が高まるなかで、世界の諸民族が自然界とどのよ

うな関係を築いてきたのかを見直そうというものでした。この連載は八坂書房より『世界民族博物誌』として出版されています。

一九九九年四月、通巻二五九号を迎えた本誌は、栗本英世編集長のもと、大きな試みをおこないます。タイトルロゴとともに表紙デザインを大きく変えたのです。それまでの表紙はロゴをはさんで上下に四角い写真スペースがあり、そこに資料の一部分を拡大した写真を配置するというもので、少し重々しい印象がありました。新しい表紙では、軽やかな動きのあるロゴに改められ、資料の写真も切り抜き画像を使った明るいイメージになりました。誌面デザインも変更され、見出しなどに使われていた茶色も明るい茶色になりました。

また、この号から、世界の名作文学(名画・名曲)を民族学者が読む(見る・聞く)とどうなるか、というコンセプトで生まれた「よむ・みる・きく」のコーナーが始まりました。第一回で取り上げられたのは『ピノッキオの冒険』、野村雅一教授(当時)が執筆し、絵本作家の岡島礼子さんが挿絵を担当しました。こうして本誌は果敢に挑戦をしてきたわけですが、二〇〇〇年前後というのは大学や博物館が広く社会に開かれた組織であることが求められ、蓄積した情報を積極的に社会に還元するべく動き始めた時代でもありました。小・中学校、高校では、地域や学校の特色に応じた学習などを実施するという「総合的な学習の時間」が始まります。そして本誌にも「博学連携」「社会連携」をキーワードとした記事が掲載されるようになります。小長谷有紀編集長の時代には「総合的な学習の時間」の柱とされる「環境」「国際理解」「福祉・健康」「情報」をテーマにしたインタビューがおこなわれ、またみんなくを学校教育の現場でも広く利用してもらえるように、本誌の配布先も関西圏の小・中学校にまで広がられました。

さらにこの時期は、災害への向き合い方をみんなくが見つめ直すひとつの契機となったといってもよいかもしれません。一九九五年の阪神・淡路大震災ののち、災害時にみんなくが果たすべき役割や復興支援のあり方を模索する記事は現在に至るまで掲載され続けています。

年	本誌のあゆみ	みんなく・世界の動き
1989	・第6代編集長に秋道智彌が就任 (1990年1月号〜1994年4月号)	・第1回特別展「大アンデス文明展——よみがえる太陽の帝国インカ」を開催
1992	・3月号にて「館長対談」コーナー(全182回)終了	・国連地球サミットが開催される
1993	・第7代編集長に野村雅一が就任 (1994年5月号〜1998年12月号) ・5月号で通巻200号を迎える	・4月 第2代館長に佐々木高明が就任(〜1997年3月) ・アオウミガメ
1994		・阪神・淡路大震災発生(1月) ・本館ホームページを開設(12月)
1995	・読者のページQ&Aを収録した「100問100答世界の民族」が出版される	
1996	・開館・創刊20周年につき、「民博とわたし」というテーマで読者から原稿を募集。4月号〜1998年3月号の「読者のページQ&A」欄で随時掲載	・開館20周年 ・4月 第3代館長に石毛直道が就任(〜2003年3月)
1997	・開館20周年につき、「あなたからのメッセージ」展にて、「月刊みんなく」版画展「文化に映った動植物」を公開(5月〜6月)	
1999	・第8代編集長に栗本英世が就任 (1999年1月号〜2000年3月号) ・4月号よりロゴを変更 	・みんなく電子ガイドおよび学習コーナーを一般公開(5月) ・「冒険は小道からはじまる」  「よむ・みる・きく」初回(1999年4月号)が
2000	・第9代編集長に小長谷有紀が就任 (2000年4月号〜2002年3月号) ・第10代編集長に印東道子が就任 (2002年4月号〜2004年3月号) ・本誌音訳版の作成が開始 ・9月号で通巻300号を迎える	・「総合的な学習の時間」が導入される
2002		・学習キット「みんなく」貸出開始(9月)  広瀬浩二准教授の発案で、本誌は視覚障害者もつ方に向けて音訳版を作成している。当初はカセットに録音されていた
2003	・「民族博物誌」が収録された『世界民族博物誌』が出版される ・第11代編集長に野村雅一が就任 (2004年4月号〜6月号) ・4月号より全面リニューアル。 ・発行元がみんなく、発行日が5日から15日になった ・第12代編集長に長野泰彦が就任 (2004年7月号〜2005年3月号) ・「表紙写真の説明」が収録された『世界民族モノ図鑑』が出版される	・4月 第4代館長に松園万亀雄が就任(〜2009年3月) ・国立大学法人法の施行により、大学共同利用機関法人・人間文化研究機構が発足(4月)
2004		

四〇〇号（二〇一一年一月号）まで
法人化の影響

そして迎えた二〇〇四年、国立大学の法人化の動きのなかで、みんなはくは大学共同利用機関から大学共同利用機関法人・人間文化研究機構を構成する一機関となりました。このときの本誌の変化は『月刊みんなはく』史上最大のものといえるでしょう。大きな変化を目前に、再度編集長に就任した野村雅一教授（当時）は、「徹底的に全部変える」と決意をかため、誌面の全面リニューアルに取りかかります。ロゴ、表紙デザインにはじまり、誌面構成そして製作体制や発行元に至る大がかりなものとなりました。雑誌『is』（ポララ文化研究所）の名編集長として知られた山内直樹さんをアドバイザーに迎え、みんなはく発行の第一号として生まれたのが三一九号となる二〇〇四年四月号です。表紙に標本資料以外のものがデザインされたのは、このときの「太陽の塔」が初めてです。それまで二色刷だった誌面にカラーページができ、メインのコーナーは、対談・インタビュー形式から特集形式に変わりました。折々の話題を複数の記事から多角的に紹介することができるのが特集形式の強みです。特別展・企画展の紹介はもちろん、二〇一七年に完了した全面改修後の本館展示の見どころについても、展示場ごとに公開時期に合わせて特集を組んできました。八杉佳穂編集長の時代には、「飲む」「呪う」「産む」など、動詞から世界の文化を切り取るというユニークな企画もありましたし、毎年恒例となった一月号の干支シリーズも、この特集形式を最大限に活かしたものと見えるでしょう。

法人化以降の新しいコーナーには三四三号（二〇〇六年四月号）からの「外国人として生きる」というものがあります。これはさまざまな境遇のなかで前向きに生きる、身近に住む外国人の存在に目を向けた連載です。このコーナーが誕生した背景には、日本社会の変化があげられるでしょう。グローバル化が進み、日本に暮らす外国人が増加し、多文化共生という課題が浮上してきたのです。その後、本コーナーは「多文化をささえる人びと」とへと引き継がれ、四二一号（二〇一一年二月号）まで長く続きました。

法人化という出来事は、みんなはくのアイデンティティを問い直すものでした。本誌も根本からそのあり方を問われ、隔月刊にする、無料化してホームページに掲載するなどの意見があり、ときに存続をめぐる議論もなされました。そして、製作体制についても不安定な時期がしばらく続くことになったのです。

そして五〇〇号を迎えた
基礎をかためる

そんな本誌も、現在は荒波を乗り越えて、ようやく安定期に入ったといえるかもしれません。現在のスタイルが生まれた二〇一〇年は、久保正敏編集長のもと、法人化の影響で揺らいだ製作体制がようやく安定し、あらためて一般読者向けの広報誌として内容を見直した年でした。

まずは表紙のデザインから見直しましょう。法人化直後、一旦は標本資料から離れた本誌の表紙デザインですが、二〇〇五年四月の三三三一号からは、表紙を飾ったモノを紹介するコーナー「表紙モノ語り」の誕生が示すように、再び標本資料へと回帰していきましました。しかし、「世界の文化を紹介するにはモノだけでなく、その背景をも紹介する必要がある」と考えた久保編集長は、みんなはくの誇る資料を大切にしつつも、文化的背景をあらわす写真などもデザインに取り入れるという自由な発想に転換しました。

そして現在のロゴは、デザイナーによって「オースドックスな明朝体がむしろ新鮮に映るのではないか」と提案されたものです。製作体制を立て直し、本誌で発信すべきことを再度見直した時代を、「原点回帰」をイメージしたというストレートなロゴがあらわしています。こうして二〇一〇年七月の三九四号から現在に続くスタイルが誕生したのです。

本誌の根底に流れるものは、冒頭でも述べたとおり、みんなはくの魅力や民族学・人類学のおもしろさをみなさんに紹介したいという強い思いです。本誌は今後も伝統を守りつつも挑戦する心を失わずに、みなさんに愛される雑誌を目指していきたいと思えます。（本誌編集室 小山茂樹、近田さやか）

年	本誌のあゆみ	みんなはく・世界の動き
2019	・通巻500号記念号（本号）を刊行	
2018	・音訳版を本館ホームページにて公開	
2017	・第18代編集長に丹羽典生が就任（2017年1月号〜）	・開館40周年 ・本館展示の全面改修が完了（3月） ・4月 第6代館長に吉田憲司が就任
2016	・『月刊みんなはく40巻総索引』を刊行（12月）	
2015	・4月号より本文を24ページから20ページに変更	
2013	・第17代編集長に山中由里子が就任（2013年4月号〜2016年12月号）	
2012	・『生き物博物誌』が収録された「食べられる生きものたち 世界の民族と食文化48」が出版される	
2011	・1月号で通巻400号を迎える ・第16代編集長に庄司博史が就任（2011年8月号〜2013年3月号）	・東日本大震災発生（3月）
2010	・7月号よりロゴを変更 ・10月号に「創刊のことば」を再録（特集「梅樺忠夫とみんなはく」）	 <p>2017年7月号ロゴ 現在のロゴは「みんなはく」ということばがもつやわらかい語感を表現している</p>
2009	 <p>2009年4月号ロゴ</p>	・4月 第5代館長に須藤健一が就任（2017年3月）
2008	・第15代編集長に久保正敏が就任（2008年4月号〜2011年7月号）	・2008年度より本館展示の全面改修を開始。展示キャプション等に英語表記が加わる
2007	・4月号よりロゴを変更	・開館30周年
2006	<ul style="list-style-type: none"> この年から毎年1月号に干支に関連した特集が掲載される（2017年1月号。番外編2018年1月号「ねこ猫ネコ」） 第14代編集長に池谷和信が就任（2006年4月号〜2008年3月号） 4月号よりロゴを変更 30巻記念号として12月号を刊行、記念座談会「月刊みんなはく」の過去・現在、そして未来、「月刊みんなはく」30巻総索引」を掲載 開館30周年記念イベントとして、『月刊みんなはく』350冊展の巡回がスタート（12月）（大阪、神戸、広島、仙台を巡回） 	 <p>2006年4月号ロゴ</p>  <p>2005年4月号ロゴ</p> <p>「外国人として生きる」初回（2006年4月号）</p>
2005	<ul style="list-style-type: none"> 第13代編集長に八杉佳穂が就任（2005年4月号〜2006年3月号） 4月号よりロゴを変更。発行日が15日から1日になった 	

Q & A O

創刊から2004年まで続き、梅棹初代館長が民博の館員と読者との「格闘の場」とも例えた人気のコーナーに「読者のページQ&A O」があった。じつはこんなところにも小さな歴史があるのだが、当初は「読者のページQ&A」として始まったこのコーナー、読者の質問だけでなく意見や感想も掲載できるよう、1978年10月号からはコーナー名に「O(オピニオン)」が加えられた。今号では通巻500号を記念して、来館者から寄せられた質問・意見に回答したい。

Q 展示場が広く、資料も豊富で、ジャングルに迷い込んだような気分になりました。見応えがありすぎて一日では展示を見きれないので、おすすめの順路や資料があれば教えてください。

A 本館展示の順路は、世界を東回り一周する民族文化の旅ができるようになっており、距離にすると約五キロメートルにもなります。本館が専門とする民族学・文化人類学では、世界の民族の文化をひとしく研究していますので、特定の地域の資料だけを取り上げて「おすすめする」とことは難しいのですが、時間がないときには、「順路にこだわらず、どこからでも自由に観覧できる」という回遊式の本館展示の特徴を活かし、自分だけのオリジナルの順路を決めて見学してはいかがでしょうか。順路設定の参考に、全面改修後の展

ままにしています。では、現地の人びとは強烈な匂いのテントのなかで暮らしているのでしょうか。本来、乾燥地帯では匂いが弱くなります。ですので、現地ではそれほど強烈な匂いはいしません。その資料がどこで使用されていたものなのか、その背景も想像してみるといいですね。(民博 上羽陽子)

Q 展示資料のなかには、みんぱくの教員が自分で作ったものもあると聞いたのですが、資料の収集はどのようにおこなっているのですか。

A 確かに民博の資料には研究者自身が制作したものがあります。例えば、アフリカ展示場の「ニヤウ・ヨレンバ(カモシカ)」は、吉田憲司館長のフィールドであるザンビアでの研究成果をもとに館長自身が制作しました。また、わたし自身は共同研究のメンバーの協力を得ながら、日本の文化展示場の大漁旗とカツオの一本釣り用の竿を高知県の漁師に作ってもらいました。いずれも教員がしっかりと現地でフィールドワークを



大漁旗(H0274116)

おこない、その地域の皆さんとよりよい人間関係を築けたからこそ、その収集方法だといえます。基本的には教員が現地から収集することが多いですが、近年では、寄贈が増えています。

示場について紹介した新『国立民族学博物館展示案内』の「テーマで読みとく」や、本誌次号からの新コーナー「みんぱく回遊」もご利用ください。あるテーマについて地域横断的に考えたいという観点から、設定された順路にとらわれない展示の見方を紹介しています。世界各地の文化の類似性・多様性が見えてきます。(本誌編集室)

Q 音楽展示ではなぜチャルメラやギターなど特定の楽器ばかり展示したのですか。

A ブリュッセル(ベルギー)やフエニックス(アメリカ合衆国)には大規模な楽器博物館があり、世界中の多種多様な楽器が展示されていますが、民博の音楽展示場には、このような網羅的な展示を実現するための十分な広さがありません。狭い空間で同じような展示をしようとすれば、代表的な楽器だけを並べる無機質な単調な展示になりがちです。

そこで、民博の音楽展示では、担当教員のこれまでの研究成果に基づいて、チャルメラやギターなど四種類の楽器群に焦点を当てて展示することにしました。展示は楽器を軸に構成されていますが、人間と音



音楽展示「ギター——歴史のなかの音」セクション

す。世界中を旅して、さまざまなものを集めた方から、博物館でより多くの人に見てもらいたいという事で寄贈される場合が多いです。もちろんこの際も教員が資料の状態や来歴などを調査し、民博でしっかり活用できると判断した資料を受け入れることとなっています。(民博 日高真吾)

Q ナイトミュージアムを開催してほしいです。

A さまざまな施設で実施されているナイトミュージアム。万博公園での夜桜や、イルミネーションを楽しんだ後に、いつもと違う夜のみんぱくを満喫するというのも素敵ですね。しかし、残念ながら、万博記念公園の開園時間との調整や、本館の開館時間を延長した場合の警備、案内等の人員確保が難しいため、現時点ではナイトミュージアムをおこなう予定はありません。とはいえ、とても魅力的なイベントですので、引き続き前向きに検討したいと思っています。(民博 広報係)

Q 中央パティオ「未来の遺跡」に入ってみました。

A 「未来の遺跡」は、水と石、タイルとアルミカプセルが共存する不思議な空間です。実際になかに入ってみると、インド産の砂岩が用いられた足場は脆く、滑りやすかったり、段差が大きかったりするため、

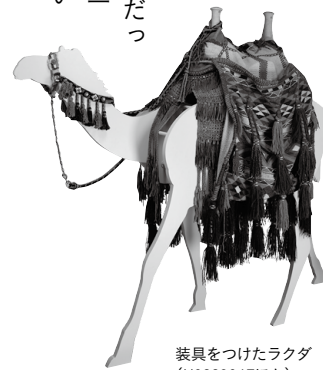


中央パティオ(中庭)を構成する「未来の遺跡」

楽との関係について考えてもらえるように工夫されています。チャルメラ展示とおして、人生の節目に音楽が演奏される理由について、ギター展示とおして、ポピュラー音楽の世界的な広がりや社会変革に音楽が果たす役割などに思いを馳せてもらえれば嬉しく思います。(民博 寺田吉孝)

Q 西アジア展示では、ラクダが突然鳴いたり、テントの匂いも強烈で驚きました。博物館なのに五感で楽しめると思いませんか？

A 西アジアではラクダは重要な役割をもっています。展示場で聞き慣れないラクダの鳴き声で立ちどまると、そこにはラクダの装身具や振りわけ袋などが展示されています。ラクダや遊牧民の文化を知るきっかけとして鳴き声を採用しました。また、二〇一七年に完了した展示の全面改修では、映像や音声などを積極的にとり入れる方針だったため、その一例ともなっています。



装具をつけたラクダ(H0229047ほか)

一方、ベドウィン(アラブ遊牧民)のテントは黒ヤギの毛を紡いで糸にして、それを使って織っています。ですので、テントの匂いは黒ヤギの毛のものです。みんぱくの標本資料は、殺虫処理などはしますが、それ以外の汚れなどの使用痕を洗ったり、拭きとったりはしません。それ自体も資料の情報としてその

安全性の面から一般のお客様への立ち入りはご遠慮いただいております。「未来の遺跡」は、日の当たり方によって、光と影のコントラストが刻一刻と変化していくため、さまざまな表情を見せてくれます。これからも、「見て」楽しんでいただければ幸いです。(民博 広報係)

Q みんぱくで結婚式の撮影をしたのですが、どのような手続きをすればよいのでしょうか。

A お二人の門出を祝した記念すべき写真の舞台に、みんぱくをお選びいただき、とても光栄に思います。みんぱくでの前撮りをご希望の場合、開館時間外での対応となりますので、まずは前撮りを依頼された先の担当者様にご相談ください。みんぱくの総務課広報係にご連絡いただくようお願いください。担当者様を通じて、具体的な日時や場所、撮影料金等の調整をさせていただきます。素晴らしい写真が撮れるといいですね。(民博 広報係)

Q みんぱくにマスコットキャラクターはいないのですか。

A かつて、Dr.みんぱくという幻のキャラクター(一四〇―一五頁参照)が存在していたようですが(本誌キャラクターやゆるキャラは存在しません。ただし、展示場に足を運んでいただければ、どのゆるキャラにも負けないような、ユニークでかわいいうな、生き生きとした表情の仮面や人形。ぜひ自分だけの、お気に入りの一点を見つけてみてください。(民博 広報係)